

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：32415

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02246

研究課題名（和文）授業研究を「核」とする学校づくり運動に関する研究

研究課題名（英文）Study on School Reform Movement that Makes Research on Teaching

研究代表者

狩野 浩二（KARINO, Kouji）

十文字学園女子大学・教育人文学部・教授

研究者番号：90280304

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：斎藤喜博は昭和戦前期から後期にかけて活動した小学校教師である。実践の主舞台は群馬である。その影響は全国に及んだ。斎藤が41歳から校長を務めた島小は全国から1万人超の参観者を集めた。8回に及ぶ学校公開研究会によりその成果を示した。教育実践記録は従来の文献にのみこだわらず写真集や映画、レコードなど多岐にわたる媒体を駆使した。自身の全集は30巻に及ぶ。本研究では散財しがちな実践史（資）料を収集、整理、電子化した。島小を起点とする学校づくり運動の全体像を把握した。斎藤は子どもと教師との接点の追究を初任教において実践する。以降、その実践研究は学校づくり運動として時代のムーブメントとなったことを実証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

斎藤喜博は、教師の仕事に授業内に留めなかった。学校行事などの授業外の仕事へとその対象を広げた。その成果により表現活動という一領域が確立した。表現活動は子どもの集中やその上に現われる美の把握として追究される。その成果が従来学力の測定をもってのみ結果を把握してきた教育界に新たなインパクトを与えた。しかしその内実は難解である。子どもと教師との接点において生じる事象をテーマとしたことからその解明が遅れた。その実態を解明したことが本研究の成果のひとつである。同時に本研究の実証には、学校づくり運動の継続、展開が必須である。今後の課題としたい。

研究成果の概要（英文）：SAITO Kihaku was an elementary school teacher who was active from the pre-war to the post-war Showa period. His main field of practice was Gunma, and his influence spread nationwide. The Shima Elementary School, where he served as principal from the age of 41, attracted over 10,000 visitors from all over Japan. Through eight open school research sessions, he demonstrated his achievements. His educational practice records utilized a wide range of media, including photo collections, films, and records, not limited to traditional literature. His complete works span 30 volumes. In this study, we collected, organized, and digitized scattered historical (resource) materials of educational practices. We grasped the overall picture of the school-building movement that originated from Shima Elementary School. He pursued the connection between children and teachers at his first school. Subsequently, his practical research proved to become a movement of the era as a school-building movement.

研究分野：教育方法学

キーワード：斎藤喜博 教授学 授業 表現活動 集中 教師 教育実践 学校づくり

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の全体状況

斎藤喜博(1911~1981)は、1952年から自ら校長として群馬県佐波郡島村立島小学校以下「島小」と略記するの学校づくりを指導した。その島小を起点とし、全国規模の授業研究と学校づくりの運動を斎藤は巻き起こした。その渦中において1981年に70歳で没する。斎藤の没後は、斎藤とともに教育や研究に関わった“教授学研究の会”がその後を引き継いだ。斎藤が自ら主宰した教授学研究の会の活動は、関係者の努力によって1995年まで継続したが、しかし、その機関誌(『事実と創造』)の編集発行が同年代に終了する。この時期をもって事実上の教育研究運動が終結した。

その後、教授学研究の会の世話人たちによって、各地で第三土曜の会や授業研究の会が組織された。しばらくはその取り組みが斎藤の遺志を継ぐこととなったが、しかし、初期のメンバーが次第に高齢化し亡くなる。そうした展開の中でそれぞれ収束してきている。

唯一盛り上がりを見せた沖縄での学校づくり運動は、2010年代をもってほぼその仕事を終えた。次なる世代の育成が課題となっている。

以上のような状況下で、学校づくりを主眼とし、その学校づくりの中での授業研究を中心とする研究は、その担い手となる学校の存在が不可欠である。さらに、その学校を支える実践家や研究者の存在が不可欠である。本研究によって、今後の学校づくり運動に資する資(史)料を次世代へと残していくという副産物を得ることができた。

(2) 個別の状況

教授学研究の会の機関誌としての使命を事実上終えた雑誌『事実と創造』は、その後も出版社(一莖書房)の努力により継続的に公刊が続いている。この誌を交流の場とするいくつかの実践、研究集団が組織されている。

この取り組みの中で、かつて斎藤喜博が主宰した当時の教授学研究の会の世話人や斎藤喜博やその周辺の実践家や研究者たちが指導した学校づくり運動から派生し、次世代の学校づくりが各地で展開した。上記(1)における沖縄の動きもその一つであった。しかしながら、相互批判の場であった機関誌を欠いた現在では、賛同するものたち相互の連携が薄くなる。研究交流もまばらとなる。こうした展開の中でその捉え方の違いが際立ってきている。すでに学校づくり運動を中心とする実践や研究の在り方自体が見直されるべき時期に来ている。

(3) 研究の状況

研究成果としては、横須賀薫編『斎藤喜博研究の現在』春風社、2012年が最近のものである。これを凌駕する研究は管見の限り未だ出ていない。

モノグラフとしては、島小の授業や斎藤喜博の言説を手がかりとする研究が現われてきている。しかしながら、それらは、教科教育学や社会教育、教育社会学などの立場から斎藤喜博や島小を起点とする学校づくり運動との関わりを見出したものに過ぎない。本来の意味での斎藤喜博研究とはなっていないのが現状である。

(4) 資(史)料の状況

斎藤喜博自身による蔵書や資(史)料群に関しては、複数の研究者によってその実態調査や資料保存などの方法をめぐって提案がなされてきた。しかしながら、これらも、遺族との間での合意が得られていない状況である。唯一、遺族によって記録された蔵書目録が関係者に渡ったものの、その内容は未だ非公開のままである。

斎藤喜博の短歌関連資料群については、群馬県が短歌関係資料を収集する過程で遺族との交渉が行なわれた。今後、県(土屋文明記念館)に移管される見込みである。その他の資料群は、手付かずのまま残されている。

島小を起点とする学校づくり運動において各地で取り組まれた資料群の一部は、電子化による保全を施した。斎藤喜博研究会が組織され、その会のメンバーが精力的に資料を発掘し、収集、電子化を済ませている。それらの資料群は、複数制作し、千葉経済短期大学、宮城教育大学、十文字学園女子大学の3箇所の関係者が同じものを保管するようにし、次世代の研究に活かせる方法を模索している。そのなかの宮城教育大学においては、教職大学院での活用が進み、教師教育の内容として活かされつつある。

2. 研究の目的

目的は、斎藤喜博に関する実践と研究に関する全容解明である。斎藤喜博は、その授業術の巧みさから、名人芸として授業研究界からは遠ざけられた。その言説は難解であるとして、学術研究は、すすんでいない。斎藤喜博個人の個性から多くの実践家や研究者が斎藤から離れていくという状況をつくってきた。今後も、その実質的な解明に力が注がれる見込みがない。

斎藤喜博と同時代を生きたものたちが今後次第に少なくなる。そうしたなかで、残された資料

の収集と保全は何より優先されなければならない状況である。本研究では、資料の収集と保全にかなりの力を割いた。それは、こうした事情からである。今後も、未発掘の資料が全国各地に散在している現状は変わらない。機会があれば、そうした未見の資料を発掘保存することが望まれる。

同時に大量に残された資(史)料群が、多岐にわたる媒体によって残されているということである。従来から、教育実践記録は文献によるものが主体であった。いわゆる文字による記録文献の読解が教育実践研究の中心であった。斎藤喜博は、さまざまな媒体を駆使してその実践を記録し残した。映画やレコード、8ミリフィルム、写真集の他、歌人として大量に創作した短歌がある。こうした従来なかった媒体によって斎藤喜博は、資料を残した。残された静止画像、動画、音声などを分析し、解釈し、その教育的価値に関する知見を得ていくことが必要となる。医学になぞらえていえば、基礎医学としての病理学が従来の教育学研究の中心であった。それに対して、斎藤喜博の場合は、臨床としての医学(医療行為)にあたる。それが斎藤喜博によって創られつつあった新しい教育学の姿である。いわば“臨床の学”としての教育学の誕生である。こうした新たな世界を構築することが斎藤喜博に関する実践と研究の全容解明につながるわけである。

本研究では、従来からなされてきた言説を手がかりにする教育研究に留まらない。斎藤喜博によって切り拓かれつつあった「臨床の学」としての教育学研究を創るための方法や内容を検討する。その上でこれからの教育学研究に真に有効となる指針を得る。

3. 研究の方法

(1) 聞き取り調査

本研究に当たっては、関係者からの聞き取り調査を一つの軸とする。これまでに授業研究を核とする学校づくり運動に関する関係者からの聞き取りをすすめている。川嶋(旧姓児島)環(元島小教師)、影山昇(東京海洋大学名誉教授)、横須賀薫(宮城教育大学名誉教授)などである。

川嶋環は、斎藤喜博が校長を務めていた島小に新卒教師として赴任した。1957(昭和32)年のことである。それ以降、斎藤が境東小学校校長として不意転する(1963年3月)までの間、島小の学校づくりに関わる。その後、東京都の教員を経て今日に至るまで、教授学研究会の会に参加する。教師としての実践を続けながら教育研究成果を発表してきている。夫の川島浩(故人)は、フォトグラファーである。学校づくり運動の起点に位置付く島小の写真を撮影している。斎藤喜博文、川島浩写真『写真集 未来誕生』麦書房、1959年などの写真記録を残している。これらの写真群については、ネガフィルム、現像後の密着(コンタクトシート)を電子化した。宮城教育大学、千葉経済短期大学、十文字学園女子大学の3箇所保存済である。

影山昇は、東京大学大学院在学中に、島小において産休代替講師として勤務した経験がある。その後、愛媛大学や東京海洋大学において教育学研究に従事してきた。島小勤務後において、斎藤喜博を当時勤務していた愛媛に招聘する。そこで研究会をひらくなどの交流を深めてきた。

横須賀薫は、宮城教育大学において教育学研究に従事する。その過程において斎藤喜博を授業分析センター教授として迎える。その後、教授学研究会の世話人代表を務める。近年は、斎藤喜博研究会を組織し、研究を継続してきている。学校づくり運動においては、共同研究者として複数の学校づくりに関わってきた。

(2) 映像資料、音声資料の分析

宮城教育大学教職大学院において組織された「授業を学ぶ会」に対して、映像等の資料を提供した。同大学の関係者とその内容を視聴し、分析したり、解釈する機会を持った。会の中心となったのは、荻田泰則である。荻田は、宮城教育大学在学中に斎藤喜博の授業を受けた。宮城県内の公立小学校で教師生活を始めた後も、宮城教育大学や横須賀薫との関わりを持ちつづける。教員退職後に宮城教育大学教職大学院に進学した。本図愛美研究室に所属する。大学院では自らの教職生活を省察し、実践記録集を公刊した(『わたしの教育実践記録 持続する学び』一莖書房、2022年)。その過程において、「授業を学ぶ会」の企画運営を行なった。本研究では、こうした研究展開の支援をうけた。

(3) 文献調査

島小の記録映画である「芽を吹く子ども」に関して、当時各地で取り組まれた試写会等の情報を収集した。同作品は、斎藤喜博によって本邦での公開を認められなかった作品である。しかしながら、管見の限りにおいて、福島県須賀川市において、その映像がライブラリーに加えられた。その後、学校等に貸し出されたと記録されている。

島小において取り組まれた学校公開研究会において使用された教材の分析と、教材開発の状況を複数の資料群から検討した。特に武田常夫が教材化した「おしになった娘」と赤坂里子が教材化した「黒いピロート服の女性」について、原資料の探索を行なった。さらに教材化された作品の分析を行なった。

斎藤喜博による著作の中から、最も初期に位置付く『教室愛』(1943年、三崎書房)を分析した。この実践記録の、その後の島小や島小を起点とする学校づくり運動への影響や効果を検討した。

(4) 斎藤喜博蔵書の検討

宮城教育大学名誉教授の横須賀薫から提供された斎藤喜博に関する蔵書目録をデータ化し、その資料群の特徴を分析した。

4. 研究成果

(1) 斎藤喜博と学校づくり運動の関係

1950年代において、日本の学校教育現場に特徴的に現われてくる教育課程の自主編成や教科用図書批判などの教育運動がある。教育政策や制度に対抗する形でそれらは展開する。それとは異なる独自の教育実践を展開したのが斎藤喜博であった。斎藤が校長を務めた島小においては、8次に及ぶ学校公開研究会が開催された。その研究会においては、島小教師たちによる授業が行なわれた。授業では、教科用図書の教材を用いた授業が行なわれる。その後、児童の力が高まるにしたがって、新たな教材を探す必要が生じる。島小における学校公開研究会の授業において第1回から第5回までは、すべて教科用図書の教材が用いられた。第6回公開研究会（1961年度）において、はじめて教科用図書以外の教材が使用された。

斎藤は、その生涯において教師と子どもとの接点について関心をもった。そうした考え方の上に立って、島小では、教材の適否を問うことはほとんどなかった。どんな教材でも授業を通してその教材の力を引き出そうと考えたといえる。教材の適否を問うような、そうしたことに時間を費やすことはなかった。それよりも、子どもと教師との接点を充実させる工夫に力を注いだ。

島小のこうした動向は、斎藤の考え方が深く島小に根付いていた証左である。このことは、島小を起点とするその後の学校づくり運動の全体に通じることである。

(2) 斎藤喜博『教室愛』とその後の学校づくり運動

島小を起点とする学校づくり運動では、教師と子どもとの接点に関する追究が特長である。こうした関心は、昭和18年に刊行された斎藤喜博『教室愛』（三崎書房）において、すでに明らかにされていた。島小において追究された「学習形態」や「劣生はいない」などの発想や「介入授業」などの授業研究方法は、すでに青年期の斎藤によって試みられてきたことである。地域の学校において、さまざまな能力差のある子どもたちとともに、いかにして未来への可能性を拓く教育実践を展開するかという課題である。その課題に斎藤喜博は向き合う。斎藤が師範学校を卒業後に赴任した玉村小学校での教育実践にすでにその特長が現われていた。

(3) 学校づくり運動の展開と島小の意義

斎藤喜博による島小実践を起点とする学校づくり運動は、今日では、ほぼ収束状況となった。1952年における島小を起点とし、ほぼ、半世紀以上にわたって日本の学校教育現場において追究されてきた。斎藤喜博の目指した学校づくりは、子どもと教師とがお互いに学び合い、切磋琢磨しあう学校である。その実践の特質は、“介入授業”に象徴的に現われている。教師たちが胸襟を開き、謙虚になって学び合う世界である。こうした学校では、子どもたちも自己を拓き、仲間とともに探求する姿勢を持ち続けることが可能となる。そのことを単なる言説として表明したのではない。教育実践として実現したのが斎藤喜博であった。したがって、その研究成果の公表は、多くは文献による。これは従来の教育研究と同様である。それに加えて、映画やレコード、8ミリフィルム、写真など、従来はなかった新たな機器や媒体を必要とした。もちろん、文献の研究を欠かすことはできない。文献によって解明される世界はある。しかしながら、これまでになかった新たな資料群が斎藤喜博を中心とする関係者によって残された。そうした資料群の解析や分析、読解が今後さらに必要となる。そして最も必要となるのが、学校づくりを実際に展開することである。このことには、その研究に参画する教師たちの存在が不可欠である。それに加えて、学校や教育委員会、自治体などの参画が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 狩野浩二	4. 巻 16(1)
2. 論文標題 教師教育におけるICT活用に関する研究 教職課程における基礎教育科目の実際を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 児童教育実践研究	6. 最初と最後の頁 57-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩野浩二	4. 巻 16(1)
2. 論文標題 「総合的な学習(探究)の時間」におけるカリキュラム開発に関する研究 学士課程における“社会にひらかれた教育課程”づくりの実際を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 児童教育実践研究	6. 最初と最後の頁 63-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩野浩二	4. 巻 53
2. 論文標題 授業研究を“核”とする学校づくり運動に関する研究 島小における学校公開研究会に関するプログラムを中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 十文字学園女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 75-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 狩野浩二	4. 巻 52
2. 論文標題 授業研究を「核」とする学校づくりに関する研究 島小の学校公開研究会を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 十文字学園女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 161 - 171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 狩野浩二	4. 巻 15
2. 論文標題 ICTによるカリキュラム開発 対話を形づくる授業の創造に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 児童教育実践研究	6. 最初と最後の頁 38 - 43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩野浩二	4. 巻 15
2. 論文標題 「総合的な学習の時間」における教育内容と方法に関する研究 地域づくりに関する素材の教材化とICT	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 児童教育実践研究	6. 最初と最後の頁 31 - 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 狩野浩二
2. 発表標題 授業研究を「核」とする学校づくりに関する研究 島小公開研究会における授業づくりを中心に
3. 学会等名 日本教育方法学会 第59回大会 (慶應義塾大学) ハイフレックス開催
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 狩野浩二
2. 発表標題 授業研究を「核」とする学校づくりに関する研究 島小公開研究会におけるプログラムを中心に
3. 学会等名 日本教育方法学会 第58回 (山口大学) ハイフレックス開催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 狩野浩二
2. 発表標題 授業研究を「核」とする学校づくり運動に関する研究 島小における学校公開研究会を中心に
3. 学会等名 日本教育方法学会 第57回大会（宮城教育大学）Zoom開催
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

児童教育学科 教員紹介 https://www.acoffice.jp/jmuhp/KgApp?resId=S000025 十文字学園女子大学 教員紹介 教育人文学部 児童教育学科 狩野浩二 https://www.acoffice.jp/jmuhp/KgApp?resId=S000025
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------